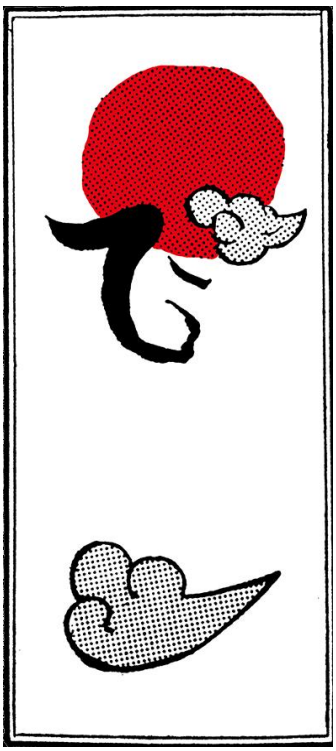

第57号
月一回発行
ひの心を継ぐ会
〒799-1336
住所：愛媛県西条市
上市甲720-1
TEL：080-2986-0856

領綱

一　私達は明徳を明らかにします
一　私達は国家の鎮護となります
一　私達は大和世界を建設します

古事記

天地の初発のとき
―実在―（六）

反省的方法―

―存在論、アリストテレス（2）

竹葉　秀雄

このアリストテレスの始源及び原因、理由（原理）は、仏教哲学の「縁起論」及び「本質論」と照合して観ると一層意味深くなるので、読者は是非「ひ」の第一〇三、一〇四、一〇五、一〇六号を読み返していただきたい。今皆さんのその記憶を呼び起こさんために「阿頼耶識縁起論」の一部を再録する。

仏教では、総てのものは縁起の法によって生じてくるものと考える。先ず因があって、そこから流れ出て縁によって相寄り相影響しあって果を生じ報い、またそれが因となって流れてやまない。即ち前に述べた十二因縁を深く考える。阿頼耶識とは宇宙万物の第一原因、大元で、この中に一切のものが出て来る種子が全部含まれていると考える。そして、この種子がそれぞれの因縁によって果を生じて発展していくとする。これを現行というている。この種子を現行せしめる原動力を法相宗では薫習と説いている。種子が因縁によって発展開発されていく状態は、恰も香りが浸み込んでいて、それが自然に発するようなもので、我々は無始以来なして来た善悪諸諸の業が細大漏さず薫じ込んでいて、それが時に応じ機に触れて外に現われて来るものであると考えるのである。即ち、この世界の森羅万象はすべて唯一絶対の根源たる阿頼耶識から生じ、その中に含有するとする。

阿頼耶は、旧称は阿梨耶で「無没」の意で、有情根本の心識で、其の人の受用すべき一切の事物の種子を含蔵する義、新称は阿頼耶で「蔵」の意、又は「室」の意である。

アリストテレスは第一動因の「思惟の思惟」を神と称した。仏教では、六識の上に第七の末那識（まなしき）を立て、之は唯識所説に第八識を所依として、且つ第八識の見方を所縁として生ずる識なり。末那識を「意」と訳す。意は思量の義、此識常に第八識の見方を縁じて、我は法なりと思量する故に末那と名づく。恒に審らかに思量して余識に勝り、第六意識と異るものとしており、これに阿頼耶識を立てて第八識とする。この阿頼耶識がアリストテレスの「思惟の思惟」にあたり、潜勢は種々であり、現勢は、現行であり、この種子を現行せしむるものを薫習といい運動が十二因縁に当るとも考えられる。この阿頼耶識の本体から、夫夫内的な原因と目的によって発展する。その属性と、構造と素材とによって、夫夫の過去の業力の作用、運命によって夫夫の一定の方向に導かれて現前するのであるとするので、夫夫の目的が形相因や動力因や目的因に当ると観られるが、更に仏教哲学では、宇宙の実体を五位七十五位に分け、六因四縁を考えているのであるが詳しくは「ひ」の第一〇三～一〇六号を見ていただきたい。

農士道

第五章 農士論

～第三節 農道的自覚～

菅原 兵治

陋室銘

この意味に於て農村人の為に万丈の気を吐いたものが劉禹錫の陋室銘であろう。

山は高きに在らず、仙有れば則ち名あり。
水は深きに在らず、龍有れば則ち霊なり。
斯れ是の陋室、惟れ吾が徳馨(かんば)し。
苔痕(たいこん)堦に上って緑に、艸色簾(れん)に入って青し。
談笑鴻儒(こうじゅ)有り、往来白丁(てい)無し。
以て素琴を調べ、金経を閲(けみ)す可し。
絲竹(しちく)の耳を乱る無く、案牘(とく)の形を労(つか)らすこと無し。
南陽の諸葛が廬(ろ)、西蜀の子雲が亭(てい)。
孔子の云う、何の陋かこれ有らん。

試みに之を意訳して見よう。「山は海抜何万尺と、唯高いばかりで有名なものではない。仮令それ程高からずとも、仙人が居れば有名になるものである。淵は又唯深いだけでは未だ霊なりとは謂い得ない。仮令それ程深からずとも、龍が棲んで居れば冒し難き霊畏の気が漂うものである。人間の住居もその通りである。俺の住んでいるこの家など、都門の大廈高楼に比ぶれば陋室ではあろうが、此の中に住んでいる俺の徳は馨しいぞ。(我等は仮令陋室に住むもこの気概がなければならぬ)だから俺の住居には俗臭が無い。試みに見よ!苔痕は堦に上って緑に、艸色は簾に入って青しじゃ。そして往来し、談笑する者は何れも大人物(鴻儒)で、下らぬ奴等(白丁)は来ぬわい。俺は此の中に在って、素琴を調べ黄金の経書を読んでいる。(「素琴」とは飾りなき素木の琴の意。陶淵明は常に無弦の素琴を撫して楽しみ、人の問うに答えて、琴中の心を得たり、何ぞ弦上の声を弄せんやと謂えりと伝えられている。)無弦の素琴、――琴や弦はどうでもよい、自然の素韻が聴き得れば以て足るのである。「金経」――銅や鉛の書ではない、黄金の経書である。古人も『我汝の如く書を読まず、故に汝の如く愚ならず』と言うているが、現今世にある書は余りにも多過ぎる。毎日毎日新刊書が幾冊出ずることであろう。然し其の中、一年後、二年後、十年後、百年後まで、人に読まれる価値あるものは何程残るであろうか。思えば実に屑のような下らぬ雑書のみが如何に多いことであろう。銅銭百枚は金貨一箇に如かず、山澤の陋室に在りて、素琴を調べ金経を閲するの邃養は、都門の高楼朱門に在りての流行的雑書の乱読に勝ること幾何ぞや。更にわが田園の住居は絲竹(ジャズ)の耳を乱ることもなく、案(つくえ)の上に堆(うづたか)く積まれている事務の書類によって身を労らすことも無い。わがこの住居は陋室ではあるが、南陽の臥龍先生諸葛孔明の蘆の如く、又、西蜀の子雲(漢の楊雄)の岷山の亭の如きものである。孔子が嘗つて九夷(田舎)に行こうとした時、人々が『陋なり、之を如何せん』というのに対して、『君子之に居る。何の陋かえれ有らん』といって、真の君子ならば、如何なる陋巷陋室に在っても、其の徳によっておのずから其の所を化して行くものであると言っていらるるが、陋室に住む者、方に此の心が無ければならぬーー。」

農道的自覚の上に立てる農村生活者に取って、まことにうれしい揚言ではないか。然も世人の多くは徒に粗衣茅屋を憎んで、其の間に何等の誇りも安けさも有ち得ぬ自らの心術の醜陋を恥じず、山澤に居るを厭うて、専ら城市に住まんことのみを希うが、吾々は希くは山林蓬蘆の気味を解し得る農道的自覚を有たねばならぬ。第二章の終りにも記したような、真の農村人としての矜恃(ほこり)は、この深き自覚の中からのみ生じて来るものである。かくて私共はかかる自覚の下に、新たなる眼を以て王陽明の何陋軒の記を読み直して見たならば、又新たなる感悟をもち得るであろう。

今年の終わりに

三浦　夏南

今年は日本自治集団の活動が始まり、完全な自給自足に向けての研究と実践に明け暮れる変化の多い一年となった。毎月のように県外に出かけては、会合があったり、調査に行ったりと、昨年とは大きく様変わりした活動的な日々となった。この十二月には自治集団の総会があり、それぞれの部会の事業内容が決定し、来年からが本格的始動となる。今年一年皆で話し合いながら描いてきた理想をどれだけこの現実に体現することが出来るのか、そこが全ての鍵となってくる。素晴らしい理想を口に出すものは多いが、それを行い表現することのできるものは圧倒的に少ない。有言実行とは当たり前のようで難しいのが実際である。

コロナ禍に代表されるように、グローバリズムの弊害があらゆるところに目に見える形で現れるようになってきた。今まで先覚者たちだけが口にしたことを、多くの人が当たり前のように口にするようになってきた。時代が悪い意味で追いつき始めているのである。人類及び地球の癌となっているグローバリズムを克服し、人類の本来あるべき生き方へと帰って行くことが、先覚者の理想ではなく、人類及び地球の緊急的な要請となってきている。

そんな加速度的に早まる時代情勢の中で、我々の活動も今まで以上に慌ただしく、忙しいものになってくることが予想されるが、そんな多忙な状況にあっても常に謙虚な姿勢で心を養う事を忘れてはいけない。逆にこんな状況だからこそ、心を養うことが極めて重要になってくる。現実が目まぐるしく変化すると、それに対応することに追われて、心は常に外に向かいやすくなるものであるが、それを解決する鍵はいつも自分の内側にしかないことを忘却してはならない。恐るべき現実の変化に対して様々な戦略や戦術が必要になってくるが、その戦略、戦術を完遂することの出来る根本的な力は、至誠仁義からしか出てくることはない。いくら戦略や戦術が整っていたとしても、それは人々の和合を以てせねば、行うことが出来ず、人々の和合は、己の内にどれだけ至誠を蓄えているかが分かれ目である。仁義を後にし、自分達が生き残りたいとの私欲を先にすれば、皆が利に向かい義を忘れ、超えるはずのグローバリズムに我々自身が飲まれることとなってしまう。

来年は今年にも増して極めて変化の多い一年となることが予想されるが、多忙な日々の中でも常に学問を積むことを忘れず、身はたとえ変転する浮世に振り回されても、心は常に祖神とともに静清たる境地にあるよう努めたいと思う。

小野鶴山の『大学師説』③

庄　宏樹

周知のように、『大学』は次のような一文で始まる。

大學の道は、明德を明らかにするに在り、民を新たにするに在り、至善に止まるに在り。

大學之道、在明明德、在新民、在止於至善。

この文章について、小野鶴山の講義を見てみると、

さて明徳新民と云が又学術の次第ぞ。我明徳、明にならいでは、人を明にせふと云ことはならぬ。又我独り明になりて、人はまゝよと云こともならぬ。人同士より合て立た天下故、われも明になり、人をも明にしてやると云が、いやと云はれぬ人道のさしあたりぞ。

とある。ここで言う「天下」とは、今日の言葉では「社会」となるであろうが、その社会というのは「人同士より合て立た」ものである、という指摘は重要である。こうした視点を欠いたままで、何かしらの社会の変革を起こそうとしても、それはほとんど実質的な意味を持たないように私には思われる。社会が人と人との関係性の総体であるとすれば、一人一人が他者とより良い関係をとりむすぼうとすることが、社会機構の改善の根柢になくてはならない。そして、その際の基盤となるのが「明徳」である。この「明徳」について、鶴山は次のように述べる。

何をするも、人の身からすることは、全体皆明徳ぞ。…… 盗をするもすぐに明徳ぞ。それは只わるい方へ用ひて暗ふなつてをるまでのことぞ。…… 立も居も、寝るも起きるも、人全体が明徳のかたまりぞ。かふ生れついた人で、わるいことはありそむないが、こゝに一つ気の毒は、序文にもある通り、人の形をなすは気からなす故、陰陽五行の気にかたづりがありて、気質の偏があるぞ。其偏なりから世間のなりへもてゆくと、好き嫌いありて、どしたいかくしたいと云心念の思惑できる。これを人欲と云。

ここで鶴山が「序文」と言っているのは、朱子が著した「大学章句序」の冒頭部分にある、「天が人民をこの地上に生み降すにあたっては、必ず仁義礼智の性を賦与されたものであるが、その気質の稟（ひん）は必ずしも同等というわけにはいかない」（蓋自天降生民、則既莫不與之以仁義禮智之性矣。然其氣質之禀、或不能齊）という文章を指してのものと思われる。

現実の社会には様々な不正が横行しているにしても、そうした行為への弁解としてしばしば持ちだされるのが、例えば家族に対する愛情であったりすることからも推測できるように、明徳は本来一人一人の中に備わっているものだ。ただ、それが人欲によって悪い方へ流されてしまっていることが問題なのである。故に学問の意義は、各人が自らの人欲を去って、明徳の本来性を明らかにしていくというところに存する。

刀と云ものがよく切れる徳あれば、さびると云病あり。あれが石の様なものなれば、さびもせぬ。明徳も、根から暗ひものなればわるいこともせぬが、なにか切たもの故、気質人欲と云病が付てくるぞ。…… よく切れる刀ゆへ、あやまちもする様なもの。それで人欲はやはり明徳がさするぞ。かふした病がある故、其病ぬかずをけば、生みのまゝの明徳が明にならぬぞ。明徳がくらめば、あたゝまりあつても死んだ身ぞ。こゝで学が入り用ぞ。其気質人欲の病を去るを、明にすると云。

刀は時々砥石を使って手入れをしなければならないが、これがただの石であれば、そのような手間をかける必要はない。しかし当然のことながら、石では絶対に人を斬ることはできない。これと同様に、人の性が悪であり、明徳などというものも存在しないのであれば、わざわざ学問などする必要もないし、善に関してはその片鱗すら、人間の行為には見出し得ないはずである。だがそのような結論は、我々の経験的事実に反する。それ故に、朱子学では性善説を唱え、明徳が天から人に賦与されている、と考えるのである。

とよくも農園だより

三浦 美恵

今年も残すところあと一か月となった師走の初日、ついに三浦家の自給自足畑「お寺さん」に、鶏がやってきました。今治まで軽トラで迎えに行き、二十羽の雌を連れてきた初日は狭いゲージに慣れていたからか、怯え、隅っこで固まっていました。その鶏達も数日経つと慣れ、今では広い小屋内を自由に走り回っています。途中で雄も一羽迎え、さらに番犬チャチャも加わり、すっかり朝の子供達とする餌やりのお仕事が定着しました。餌は、各地を見学して学び、現在は古米を五割、米ぬか三割、おから一割弱、魚かす一割弱、少しの手作り発酵飼料と料理・食事中に出る残渣を混ぜてやっています。毎朝子供達と鶏の様子を観察し、前日の餌の残り具合、水の減り具合、卵を生んでいないかを確認するのですが、卵はまだ生んでいません。出生日齢から換算すると、いつ生んでもおかしくないので、毎日子供達とワクワク産卵箱を覗いています。

また、塩ハウスの建設にも取り組みました。塩は毎日かき混ぜなければならないので、ハウスは庭に建てることに決めました。近くの農家さんから譲っていただいたハウス用資材を、土地の面積に合わせて切り、組み立てていきます。レベルを測り、水平になるよう下にコンクリートを敷き詰め、ハウスの大枠はほぼ完成しました。この後は塩による浸食を防げるよう、塗料を塗ったり、透度の高いビニールを張ったり、塩をかき混ぜるための容器を作成して完成となります。塗料と容器の一部となる木の乾燥に時間がかかるため、十二月中に完成とはなりませんでしたが、来月には良いものが完成しそうです。

今月はその他にも、収穫していたソバの実をついに製粉・製麺して、蕎麦の自給に成功しました。脱穀・唐箕がけの後にも石抜き、洗い、乾燥といった工程があり、また製粉とふるいも何度か繰り返す手間もあり、蕎麦を蒔いた時には想像もつかなかった作業の大変さに驚かされました。しかし手塩にかけた蕎麦を初めて食べた時の感動は忘れられません。

その他にも、醒庵忌の開催、栽培した小粒大豆からの納豆づくり、黒糖づくりのお手伝い、浴衣製作、柿酢づくり、秋野菜の収穫・手入れ、栽培中の麦踏みも行いました。家族お揃いの三年手帳を開いて今年を振り返ってみると、七月から超特急で自給自足が進み、今年中にかなりの分野に手を付けることができました。来年はさらに麹づくりや加工品、馬耕等に取り組み、今年取り組めたものに関してはさらに良いものになるよう工夫していこうと思っています。

今年も竹葉先生の「ひ」の精神を継いで、家族一同協力してここまでやってこれました。家族が協力してやっていくというのは簡単なようで非常に難しいもので、ここに日々の学問の成果が問われると感じます。自給自足に夢中になって本を忘れないよう、来年も朝夕の参拝や「御稜威輝やかしめ給へ」の念唱、毎朝の主人との勉強会、自分の勉強に努めたいと思います。皆さまどうぞ良いお年をお迎えください。

★一燈照偶 万燈照国

ひの心を継ぐ会は竹葉秀雄・近藤美佐子両先生の精神を継承し、発展させることを目的として生まれた会です。一人の「ひ」の精神が周囲の人々の心に「ひ」を燈し、やがてそれが国を照らす「ひ」になることを願い、活動を行っております。皆様には何卒ご理解とご支援を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

★年会費

一般会員　三千円
賛助会員　一万円
特別賛助会員　三万円
支援会員　一万円

★振込口座

愛媛銀行　普通預金　本町支店
口座番号　六一四二七三五
『ひの心を継ぐ会』